2003年 7月号　Enfanter　No.290

あんふぁんて

Enfanterとはフランス語で
①子を産む ②(計画などを)考え出す ③(作品などを)創り出す、の意

あの人達といて楽しいの？
彼女は言った
胸にスンと響いた

私　一緒にいて楽しくない人達と
仲よくしようとしている

子どもの年齢が近いから
家が近所だから
あのグループに入っていた方が　何かと便利
誰でもいいから　ママ友というものがほしい

理由をありったけ並べて
一生懸命　友達になろうとしていた

自分の本当の気持ちを
きちんと聞いてみよう
そしたら　案外答えはすぐ
みつかるのかも

・詩　湯元
・イラスト　高橋

図書・行物
157.12
大阪府教育会館
子育て支援センター

特集

ママ友の人間関係　— 話して、聞いて、感じたこと　p2

・平和を創る会のページ　p 8
・あんふぁんてからあんふぁんてへ　p 10
・情報コーナー　p 12
・ご存じですか！ 教育基本法が改正？　p9
・「少子化社会対策基本法案」って何？　p 11
・事務局から　p12

特集

ママ友の人間関係
――話して、聞いて、感じたこと

今年の二月号『母親同士の子どもを挟んだ人間関係の難しさ』を読んで、ああ、こういうことをおおっぴらに話していいんだなあと思った。少しでもラクな人間関係を作るために、こういうテーマで話をしてみたいし、他の方の話を聞いて何かヒントを得られたらいいなあとも感じた。

いろんな思いを抱いたあんふぁんて会員が、グループ・アヴァン主催の「子育てのための母親同士のコミュニケーションワークショップ&講演会」にやってきた。

今回の特集は、そこで話し合ったり、内田良子先生のお話を聞いた会員の体験や意見を中心にまとめてみた。

（武蔵野市　）

心のポケットを増やしたい

多摩市

「ママ友って必要なのかな？」と悩み始めていた時に今回のグループワーク・講演会があることを知りました。「大人とおしゃべりがしたい」と願い、子どもと二人でいることが苦しかった時もあったのに、最近はママ友でいつも一緒に行動することに疲れていました。少しでもみんなと違うことをすると陰で批判されているように感じる居心地の悪さ。みんなといると楽しかった時間が最近は気が滅入る重たい時間となっています。「グループから抜け出して行動したい。でもまた誰とも話ができない辛い思いはしたくないし…」こんな迷いに答えを出したくて参加しました。

グループワークでは、参加者がそれぞれの思いを話しました。違う年の子どもの母親が参加しているので、悩みを色んな角度から見て話し合う事ができます。同じ年の子どものママ友といる時は仲間から外れないよう気を配り、無理して自分の感情を抑えていました。そして、胸の中の小さな不満が、我慢を重ねてどんどん大きな不満になっていたのです。グループワークの中で自分の思いを声に出してぶつけるうちに、答えはすぐに出なくても深い悩みの中から抜け出して前に進もう！そう思うことができました。

また、仕事をしながら子育てをしている方と話をする機会を得て感じたのは、今の私は気持ちの切り替えが上手くいかなくなっているということです。家にいるとママ友との些細なトラブルに何日も悩み、鬱々とした気分を変えられず毎日を過ごしてしまいがちです。でも仕事をしていると、ひとつのことに深く悩んでいては前に進めません。仕事をすることで上手く気持ちの切り替えができるのではないかと感じました。

先生の講演でもこのことに触れて「仕事をしている人は『私』を持っている。自分のやりたいことがあるので自分の考えもしっかり持っている」とお話がありました。「仕事をしていない人でも、私が私として輝けるものをひとつ持つ事が大切」なのです。「母親同士の人間関係などで悩んだら、少しその場を離れてみる。気の合わない人がいてそこに行きたくないと思うのは自然なことで、そこで悩むのではなく自分が楽しめるところに出掛けてみること」と伺い、私はもっと自分の気持ちを大事にしようと思うようになりました。気に入られようと自分らしさを失っていたことに気が付きました。

今、私の悩みはすべて解決した訳ではないけれど、ひとつの場所で悩んでいないで興味のある場所にどんどん出掛けてみようと思います。そうしてたくさん自分の心のポケットを増やす事で上手く気持ちを切り替えることができるのではないかなぁとワクワクしてきました。「とりあえず一緒に行動する仲間」からは少し距離をおいて、自分の世界を広げていきたい！　そうして前に進もうとすればきっといつか自分のありのままの気持ちを話せる友人にも出会えるのではないでしょうか。子育て＝自分育てとは本当に良く言ったものだ！　と感心しながら、今日も迷いつつ前進する私です。

子どもをはさんだ母親同士の関係について

板橋区

ワークショップに出る前は「心を開いてもらえないのは、自分に何かあるからなのでは…」と不安になっていたのですが、「心を開くには不安がある」（開いた後に自分と距離をおかれるのが怖い）といったことを皆さんそろっておっしゃっているのを聞いて、「ほどほど」感を皆さんがさぐっているんだということがよくわかりました。

今、私自身が下の子を幼稚園を卒園させてから言えるのは、幼稚園や近所の公園など、ある程度（情報網としての）つながりをもたないと不安に感じて仲間を求めていた時、「どんなふうに輪の中に入っていくか」というところにいつも「ストレス」を感じていたということです。この人たちはどんなことに興味をもっているのか？　とかどんな話題なら話しかけてもそっけない返事で終わらない（話が続く）のかを《考えて》つきあっていたからストレスだったのだと思います。ところが、一度その輪に入ってしまうと、今度は、自分のいない所での会話が気になり、どんどん深みにはまってゆくのがわかりました。（いつも一緒現象、疎外されたらたい（～ん！）でも、もともと探り合いの集団なわけですから、長続きするはずがない。そのことに気がついたとき、あっさり不安が消え、一人でも平気になりました。

今も、もちろん二人の子どもをはさんだ母親同士の付き合いはないわけではないので、「ほどほど」の距離を模索中です。

ママ友についての一考

豊島区

私は中二、小六、小二の男ばかりの母。ママ友歴はかれこれ十三年。ママ友付き合いはかなりのベテラン？　みたいだが、さにあらず、海千山千の大変な体験だった。保育園、幼稚園、小学校、中学校とにわたったが、一番大変だったのは長男三男の幼稚園時代。

母親間のグループ化、はずし、陰口、裏表ありありだった。送迎はお仕事、子どものための営業と割り切っても、結構きつかった。関わるまいとかわそうとしても、巻き込まれてしまうことも。送迎での立ち話、園外での親同士のつきあい、行事の協力、降園後のお稽古事や遊び、こんなとこからのすれ違い。そんなことをみているうちに、思ったことをあれこれ少し。

ママ達は必ずと言っていい位、群れる。以前の私も何となく一人で居ることに不安で、頑張って群れようとしていた。結局は私の性分や、群れていることの弊害がいやになり、今は何となく一人。何でつるむのか？　誰かと一緒でないと落ち着かないのか？　一人だと差はあっても、不安なのか？　自然に一緒に居るときはいいけど、無理してくっついている関係は、どこか依存的で息苦しい。もちろん、お互いの家族が快適ならば楽しく過ごせてそれに越したことはない。でも合わせすぎるあまり、母たちが疲れていくならば、変。皆で仲良く揃えるという、ママ友の幻みたいなイメージに縛られてるとかなり苦しい。

この年になると？？　思春期の女友達とは違って、皆それぞれ妊みも事情も違うじゃない。たまたま、同い年の子がいて知り合った位なんだから、違いはゆるやかに認め合って、いい距離感で付き合いたいなあ。

ちなみに、事件ありありに懲りた私は、「ママ同士の裏表は苦手、場の雰囲気も読めないの。こんな気の利かない私だけど、気楽な付き合いでよければ、よろしくね」という心境をいつも最初に言うようにした。うちに呼んだりして、早いうちにこっちの雰囲気を伝えるようにしている。

大雑把な我が家だが、それでOKな方は付き合って頂いている。こちらからみてちょっと違うな、という方には世間的な誠意を持った常識的な対応をするようにしている。そして、相手もベースも大切にするし、こちらも無理しない、楽しいと思える楽な付き合いをしている。

あと、自分の考えを言うときはわかりやすい、誤解のない表現で、優しいけど、きちんと伝わる言い方をするようにしている、ってこれはママ友に限らず、他の人間関係に共通するかしらね。

それでもうまく行かない場合は、こだわらない。人それぞれだしね。あまり、期待しすぎないことも肝要かな。ゆったり自分を持ってたら、付き合いも楽になった。私の友達もできた。そんなおまけもついてきました。今苦労しているおかあさんには、私らしさはそのままで十分。ぼちぼちいこうぜ！　って言いたいです。あせらないでファイト！　です。

ママ友――　私の遍歴

調布市　大野

①　一才前の最初の子どもを姑に預け、フェミニストセラピーの話し合いに出る。せっぱつまっていて、どうにか抜け穴を見つけたい気持ちで。そこで、子育てが一段落した先を行く女性たちに出会い、同じ立場のママさん同士で話せる場を持てたらとアドバイスされる。この時点で公園デビューはしていても、その場に入りきれず、人のいない頃行ったり、色々な公園をジプシーしていた。なじめない理由は、私自身が変わっている、他人に合わせることが苦手といったこともあったと思う。例えば、新聞が好きな私は、公園にいってベビーカーで寝ている子の隣のベンチで新聞を広げて読んでたりする。でもこれって、他のママさんたちから見ると変みたい…。

②　長男が一才過ぎに公民館で開催された赤ちゃん講座のあとも皆で集まりたいと言った人と共に、受講者に電話をして、グループを作った。二週間に一度集まって、当番のお母さんが考えた遊びをするだけだが、一年以上続いた。一才前後の赤ちゃんなので、子ども同士のトラブルはなく楽だったが、たった十人足らずのママさんの中でメンバーのうわさ話や批判があったりで自然消滅する。

③　預けあいや子育てを考える会の活動

知り合った人と二人で二人の思う通りのグループを作ろうとするが、これも一年弱で二人目を出産したこともあって、自然消滅。言い出しっぺの二人に比重が片寄りすぎたのが原因だと思う。特に預け合いは、ある程度の距離の近さが必要に思った。ところが、近所では、価値観の合う人がなかなか見つからない。難しいネ！

④　下の子を産んでからは、二人の子を連れて外出するのが大変で、とてもグループ活動はできず、保育付講座に参加したり、保育園のあきを待ち続け、三年目にやっと二人を入園させることが出来た。

⑤　保育園から小学校と、ママ友とのつき合いは、PTAや子ども会その他と多いが、どれも私にとっては気が重い。一対一だとそれ程でもないのだが、クラスの親睦会にしろ、サッカーの試合のお手伝い（女性役割を要求されるのが不愉快）にしろ、とても疲れる。運動会観戦さえ、私には他のママさんと会わなくてはいけないというだけで気が重いところがある。余程ママさん同士のつき合いに疲れて、絶望しているのだと思う。だから、出来うる限り夫を連れ出す。または代わって出席してもらう。

このような遍歴を重ねてきた私は、ママ友やそのグループに対して、閉鎖的な、アンバランスな、特異なグループという見方が強い。原因は、母と子だけというところだと思う。男性の目がない。年長者の目がない。「地域で子育て」なんてスローガンだけの夢物語だけど、せめて母と子だけのグループは片寄っているという認識は持っていた方が楽だと思う。子育てはその人のそれまでの生き方、環境が強く反映しているので、自分の育て方に自信が持てないのとうらはらに、自分と違う人を批判したらり貶めたりする人がいる。現に私も自分と違う価値観の人を批判したい気持ちいっぱいで、その中でつき合うのだから、とてもストレスをためることになる。グループ内で居心地が悪くなったら、どうにかして抜け道を見つけて、その場から逃げ出した方がいいというのが私の感想。

丸めた紙をのぞいてみよう

豊島区

「何でもいいので紙を丸めてみてください」講演会で講師の内田良子先生は唐突におっしゃった。

「丸めた紙をのぞいてみてください。そう望遠鏡のように」

「？」疑問を残しつつ、紙を丸めて、のぞいてみた。少し離れたところに座る女性の洋服の色が、鮮やかに見えた。同じ黒なのに、くっきり、はっきりした色になり、彼女の姿が、ぐっと私の方に近づいてきた。

「では、紙をはずして見てみてください」

彼女の姿は遠くなり、その隣りに座る女性も見えてきた。色は全体的にグレーがかったぼんやりとした感じになった。

「何かにとらわれているときの視線は、そういうものです。一点を見つめすぎると、それのみがとても大きくクローズアップして見え、他のものが見えなくなるのです。隣りの家の物音が気になりだすと、他にもっと大きい音がしても気にならないのに、隣りの小さな音すら気になる、というのも同じことです。」

私のママ友に対する視線はまさにこれだった。普通にしていたらたいして気にならない言動なのに、「あれは私と仲良くしたくないからとった行動かしら？」と勝手に解釈し一人落ち込む、毎日毎日そういうことばかりだった。

思えば、長男を出産してからの三年半は「ママ友がほしい！」ともがいていた日々だった。育児の閉塞感から抜け出したくて同じような立場のママ友を求めた、簡単にまとめてしまえばそういうことなのだろう。だが、それだけではないような気もする。今もその理由はよくわからない。私は常々何か悩みがあるときは、内にこもるより、外で行動してぶつかって答えをみつけようと考える傾向にあり、ママ友を狂うほど求めていたころは、ママたちが集まる場所に顔を出しては、話しかけたり、人の話に耳を傾けたり、とにかく行動した。おかげで知り合いはできたけれど、深いつきあいには発展せず、いつも何かが違うと思い、さらにもがいていた。公園ジプシー・児童館ジプシーだった。

それが、「丸めた紙をのぞく」前の私だった。

内田先生のお話を聞いて、ママ友を作ることにこだわりすぎていることに気づいた。それよりまず自分の子どもとの関係をきちんと築かなければいけないと思った。そして私は誰ともコミュニケーションをとれていないことに気づき、愕然とした。ママたちと一緒にいるときは子どもの様子が気になって結局話を聞いていない、子どもと一緒にいるときは家事やその他のことで頭がいっぱいで子どもと遊んでいない、子どもの話も上の空で聞いている、そんな状態だった。とにかく他人の話を聞いてみよう、興味を持って聞いてみよう、と決心した。

グループワークで何人かの参加者の方とお話して思ったのは、まずは自分をきちんと表現しないといけないということだった。ママ友との関係では、自分のことをどこまで話していいのかいつも迷っていて、「私はこういう人間です！」ときちんと言えず、相手もどこまで踏み込んでいいのか迷っており、お互い探り合いばかりだった。当たり障りのない会話はイヤと思いつつも、自分からは当たり障りのない話題しか出さないという中途半端さもイヤだった。本音で語っていこうと思った。それで受け入れてくれない人とは、ご縁がなかったとあきらめるしかないのかなと。

四月から長男が幼稚園に入園し、初めはとても不安だった。ママたちの輪に入れるか、どんな人たちなのか。そんな心配をよそに、なぜか長男のクラスのママたちは入園して間もないというのにとても団結している。仲間はずれとか陰口といったこわい雰囲気もない。そんな中で、相手の話をきちんと聞いているかは今もって自信がない。大人との会話に飢えていたので、会話が始まると「私も話したい！」と思って、つい話しすぎてしまう。ただ、「私はこうです！」というのは少しずつができているようだ。今日も幼稚園のあとクラスのほとんどが近くの公園で遊ぶと言っていたが、子どもがとても疲れていたので今日はやめて帰ってきた。以前の私なら、公園にいないときに何があったのか不安で、子どもの状態も見ずにきっと行っていただろう。

これからは、何かにとらわれているなと感じたら、また「紙を丸めてみよう」と思っている。

☆雑誌に載りました！

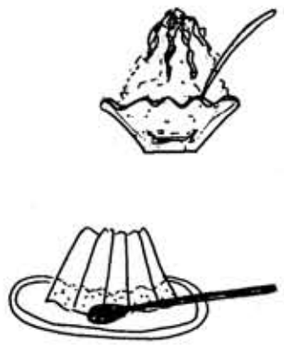
東京都

雑誌『ちいさい・おおきい・よわい・つよい』（ジャパンマシニスト社・二〇〇三年二月号）に「お母さんたちと語り合って考えたこと」という私の文章が掲載されました。

子育て中の母親が置かれている環境やママ友とのおつき合いの現状に、音羽幼女殺人事件の裁判を傍聴して感じたことを加えてまとめたものです。

興味のある方は、是非ご一読ください。執筆に当たっては、昨夏の座談会や、会報一・二月合併号で集まった声を参考にさせていただきました。

ご協力ありがとうございました。



冷却期間をおいて

武蔵野市

長男が生まれてから六年あまり、仕事を持たない私の人間関係の重点は子どもをはさんだ母親同士にあり、「心地よい距離」を探しながらこまできた。

人づき合いがうんと上手なわけではないし、ときどき「うーん？」と考えてしまうこともあったが、とくに大きな衝突やものすごく嫌な思いをせずにこれたのは、もちろん周りの人のお陰でもあるけれど、ラッキーな状況があったからだと思っている。

というのは、ちょっとやばいと思いはじめる頃に、次の子を妊娠したり、出産してしばらく外出できなくなったり、子どもの誰かが病気をしたり、夫が転勤になったり、子どもが幼稚園を卒園したりという事情が生じ、付き合いを中断せざるを得ないことが起こるのだ。

そのときは、お付き合いできなくなるさびしさや不安もあったが、後で考えると、ちょうどいい冷却期間ができて、あれがよかったのかもしれないと思える。

今回の講演で、人間関係がうまくいかないのなら、その場を離れるといい、というようなことを内田先生がおっしゃっていたのに、とても共感した。今まではたまたま不可抗力のような状況に乗って偶然うまく乗り切れたけれど、今後もし、煮詰まるようなことがあったら、ちょっと離れてみるといいのだなあと思った。

昨年度の息子の幼稚園のお母さん仲間は、エネルギッシュで料理も手芸も得意な人が多くて、グイグイ引っ張られるようだった。面白い人たちで、会っておしゃべりするのも楽しかったのだが、幼ない子を三人かかえていて不器用な私としては、息切れすることもあった。「無理しないでいいよ」と言って気遣ってくれるのに、何もしないのも悪いかなあとひょこひょこ出て行って、役に立たないのに後でドーっと疲れたりするのだ。

幼稚園の保護者の中には、集まりに極力出てこない人もいた。そういう人を非難する空気は全くなかったので、参加しないというスタンスもとることはできた。でも私は、それもいやだった。たまにはみんなで集まるのも楽しかったからだ。

気心が知れてくると、自分の意見も言いやすくなって、「そこまでやらなくてもいいんじゃないの」とか「なるべく簡単にやろうよ」などと言えるようになった。でもやっぱり力のある人が多いから、ものすごく凝ったものになっちゃうんだけれど、私の限界を知ってもらったらラクになった。ひどく面倒くさがりだと思われたかもしれないけれど、私と似たような考えの人も発見できて良かった。

そうこうしているうちに息子が卒園し、お付き合いもなくなった。先日、二カ月半ぶりに集まりがあった。手作りのお菓子がズラリと並んだ。私はそういうこととは知らずに手ぶらで行ってしまった（よく考えれば予想できたことなのに）。以前だったら冷や汗が出ただろうが、久しぶりにみんなに会っておしゃべりに夢中になり、ほとんど全種類のお菓子をごちそうになって、「息子が眠そうだから、そろそろ帰るね。ごちそうさまー」と早めに引き上げてきた。私も図々しくなったものだ。

肩の力を抜いて「いい加減」に

豊島区

子どもが生まれてからずっとママ友を作りたいと奮闘していたんだと思う。

十ヵ月になった娘を連れて児童館や公園等に通い続け、友だちを探し求めていた。子どもと適度な距離を保ちたかったから、自分からも色々な人に話し掛けてみたり。

でも、広く浅く付き合うのが相手対して失礼な感じがしてつい深入りしたりして、境界線を失いがちでした。仲良くなったはず!?のママ友が別の人と話しているだけで私から離れていくのではと錯覚し怖くなって自分だけおいていかれるような感触がしていました。

去年から子どもが幼稚園に入り、お迎えに行ったとき、声をかけてもらえない、誘われない、それって「私が嫌いだから!?」と過剰反応するようになっていました。そうなると何もかもがネガティブな考え方になってしまい、子どもが「幼稚園に行きたくない」と言おうものなら、何故行きたくないのか理由も聞かずに叱責してしまい「甘ったれるな！皆が楽しく行ってるのに、なんでうちの子は。許さない！」って無言のメッセージを送り、子どもに私の理想を求めてしまう。

しかし、子どもが体調不良で熱を出し、幼稚園を休みがちになって、ようやく気づいたことがあった。私の頭の中でジグソーパズルのように完ペキ（誰とでも仲良く、いつでもOK）を求め、子どもに無理させていたこと、自己満足の塊だったのかもしれない。

逆に私が肩の力を抜くことで「いい加減」となり、自然体でいることで今まで見えなかった事柄が見えてきた。

どこまで入っていいのか境界線が分からなくなったときは、素直に今の私の態度で嫌な思いをしたか相手に気持ちを確認するようになり、「私は深くゆっくり付き合っていきたいタイプだからよろしくね」と前もって伝えておくようになった。

私自身が無理せず自然体で付き合うことで、相手も自然体でいられるのかナと思うようになりました。

特集を担当して

「がんばらない」というのが、私のモットーだ。何事も力を入れてしまいがち、暴走してしまいがちの自分自身に対するいましめをこめて。今回の講演会や特集の編集を通して、ますますその思いを強くした。ママ友とのおつきあいも自分の気持ちに耳を傾けながら、肩の力をぬいていこうと思った。

（湯元　　）

今回、このようなテーマで特集を組んだことでママ友について「私はどう付き合っていきたいか」と考えるきっかけになった気がします。

今までは本音を出せば傷つき孤立するのではと不安で、ママ友に対して遠慮がちになって逆に疎遠になってしまうパターンでした。

子どもを挟んだ母親同士の関係＝相手に合わせることだと認識していました。が、これから子育ての情報を交換したり、助け合いながら子育てをしたり、自分自身がママ友関係を楽しむことで、ストレスを軽減したりして、同じ悩みを分かり合える友人として、自分の意見を述べていけたらいいなあと思います。

（小澤　　）

幼稚園のママ友のネットワークは頼りになることが多く、本当にいろいろ助けてもらっている。ママ友も私にとっては大切だからこそ、それとは別のところにも居場所を作って、意識を集中させすぎないのがいいのかと思った。

（伊藤　　）

平和を創る会のページ

みんなで考えよう

大田区

二十一世紀の日本で、有事関連、住基ネット、個人情報、そして心神医療観察法案と、戦後最大の悪法が次々に成立している（今後も少子化社会対策基本法、国立大学法人法案など、亡国の流れが…）。

六月十日の朝日新聞夕刊で河原宏氏は「国会審議に使われた？有事法成立と白装束集団」として、あのネタ（？）が有事3法を通すために利用された可能性を指摘していた。その一方で各マスコミは「北朝鮮脅威論」を煽り続け、世論を一色に染めつつある。

有事法制の内容は、少し勉強すれば国家の都合により、いくらでも人権や国民の財産を蹂躙できる仕組みを整備するものだとわかる。

有事3法の成立が意味するところは一言でいって「戦争をしない国」（そう宣言することで国際紛争から一線を引けた国）から「戦争する国」（そう宣言・法整備することで、とめどない対米協力や実際の参戦が可能になり、国際紛争に進んで巻き込まれる国）に日本が変貌を遂げたということ。

それほどの大転換が、国民の気づかない、（気づこうともしない）うちに起こっているのだから驚きだ。しかし、国民一人ひとりには「思考停止」に陥らないで考える義務がある。と同時に、考えた上で大転換の討議・決定に参加する権利があるのではないか。

（このシリーズ・つづく）

〔図書コーナー〕

『愛と怒り　闘う勇気　女性ジャーナリスト　いのちの記録』

松井やより著（二〇〇三年、岩波書店）

名古屋市

膨大なアメリカの軍事力、比類ないアメリカの経済力。私たちの国・日本には軍事力がない。だからアメリカの戦力に依存する。そして、グローバル・スタンダードという言葉とともに、日本人は今のままではアメリカのビジネススタイルに負けてしまう、という論調がある。そうした話に出くわすと、やっぱりアメリカに、つまり強いものに従い、長いものに巻かれていないと、自分がミジメな敗北者になっちゃうのかな、と不安になってしまう。

ほんとうにそうなのだろうか。自分に対するその不安が他の国の弱い立場の人たちを追い詰めてもいるのかもしれない。そう松井さんの自伝で彼女の足跡を追って思った。

従軍慰安婦の補償について、日本の正規の司法制度ではラチがあかなかった。そこで松井さんは民衆法廷である「女性国際戦犯法廷」を思い立つ。かつてバートランド・ラッセルやサルトルが企画した「ラッセル法廷」から得た着想だという。ラッセル法廷は、ベトナム戦争の折のアメリカの戦争犯罪を裁いた、〔民衆法廷〕＝people's court（ピープルズ・コート）だ。

『ピープルズ・コート、民衆法廷』。なんて素敵な思いつきだろう。松井さんの死から三カ月も経たず、結局アメリカのイラク攻撃は避けられなかったしイラクの人は傷ついてしまった。でも、日本でも今、イラクの人々に対するアメリカの戦争犯罪を裁こうとして市民が民衆法廷を開いている。松井さんはいないし、国家権力に比べたら私たちは無力に見えるけれど、できることもあるのではないか、と思わせてくれる。

「流行り」ばかり追いがちな日本人には、松井やよりさんの活動は過去のものと感じるかも知れない。「そういうこともあったのね」で終わるかもしれない。だけど私は、そこに書かれていることの中から、本質的なものを見出して、未来の問題解決のヒントにできるものがたくさんある、と思っている。松井さんがラッセル法廷からヒントを得たように。

緊急増刊『世界』「NO　WAR！　立ち上がった世界市民の記録」

岩波書店刊行・1,200円

大田区

この本は、世界で何が起きたか、日本で何が始まっているか、世界市民――未来への可能性などのドキュメントに何のための戦争か、何をもたらすか・・・といった評論もプラスされた、充実の一冊。豪華執筆（寄稿者）陣に国際法研究者の声明、ダライ・ラマ、マイケル・ムーアのスピーチまで収録されていて、これは歴史的資料といえるかも。

私はこの本を希望の糧にするつもりです。

ご存じですか！教育基本法が改正？（改悪？）されようとしていること　―パート②

教育基本法が変わると「子ども達が戦場へ送られてしまう」事態が起こるかもしれない

豊島区

先日事務局宛に以下のようなメールでの投稿があった。内容が五月号の学校特集でも触れた現在進行形の教育基本法改正（改悪？）に関わることだったので、特集メンバーで考えてみる事にした。

★　★　★

『五月二十日の朝日新聞に掲載された意見広告について』

板橋区

その日も私は、朝の家事をすませ、一息つきながら新聞を広げていました。すると、私のなかに「子ども達を戦争におくらない！」という強烈なコピーが入ってきました。はじっこには、「とりあえずの説明書と切りとって葉書にはって送ってください。」という署名用の書き込み欄があった。私は祖母から「赤紙」の話しだの、自由のない苦しみだのを聞かされていたので、戦争自体が許せない事だと思っています。さっそく署名を、と思ったが自分の住所等を書き込んで送るには説明が少ないな、と思い電話をしてみました。

「教育基本法の改悪についてうんぬん…」と最初は言っていましたがそのうち「君が代や国旗掲揚を強制するのはおかしい」という話が延々と始まりました。

私にとって国旗は国の「マーク」でしかなく君が代は「テーマソング」ぐらいにしか思っていません。それに関して良し悪しの感覚は余りありません。もし、強制しないで！というのなら「こういう理由で国旗はこんなものを」とか「君が代の歌詞がこんな風に嫌なのでこんな風にかえて」と、なぜそうなのか、どういう経緯でこうなっているのかもっとわかるような説明がなければ、話は食い違うばかりです。

愛国精神を育てる教育がよくない。というけれど、私の愛国心はワールドカップやオリンピックでは日本代表を応援したいと思うぐらい。それは、自分の子どもが所属しているチームを応援するのと同じ気持ちです。自分のなかでは、これがイコール戦争賛成、とはならないと思っている…そして、自分の生まれ育ったこの国を愛してはどうしていけないのでしょう。

電話口の女性は、そんなこのよっ！といわんばかりんで電話をしてきたのよっ！といわんばかりに反論してきました。しかし、私の耳には残っていません。色々いわれたが何をいわれているのかわからなかった。（???）だったのです。でも最後の方に「スポーツは技術を鑑賞するもの。」という一言で私は、「もういいです。」と電話を切ってしまった。

本当はこんなことをいうために電話したのではないはずなのに…いろんな意見に耳を傾けなければと思うが、今の私には、なぜ、教育基本法が変わると子ども達を戦争に送る事になるのか？「君が代」や「日の丸」のことがどうして重要なのか何も知らない。分からない。私はこの国を愛していると思っているが、たとえ罰せられようともわが子に「お国のために死んでおくれ」そういう言葉は絶対言わない自信がある。ただ、今、力をあつめて戦争に協力しない国にできるのならそうしたい、と心から思っているのに、どうしてこうなってしまったのだろう。

★　★　★

私たちは誰も戦争などやりたくないし、平和を願っている。その思いは同じなのにくい違いがおきてくるのはなぜか。それは、一口に言ってしまえばジェネレーション・ギャップかと思う。日本が体験した戦争が終って六十年近く経ち、人々の意識も変わってしまったのだ。しかし、せっかくの多くの人たちの非戦・反戦の気持ちが、一つになる事ができないのはとても残念なので、それを阻んでいる要因を少しでも解明し、ギャップを埋める作業をしてみたいと思う。

そこで、一番わかりにくいにもかかわらずよく出てくる、『「君が代」「日の丸」がなぜ戦争の象徴として捉えられるのか』をとりあげ、考え、そこから「子ども達を戦場に送らない」ためにそれぞれが出来る事を考えていきたい。次号で詳しく報告するが、この問題に興味のある人、一緒に話し合いたいと思う人は至急事務局まで連絡を。

あんふぁんてから　あんふぁんてへ

生活の中から感じること

品川区

SARSのかげに有事法制、住基ネットとうごめいているかんがありますが、東京都は住基本ネットに参加しない都内の自治体に、「接続するように」勧告したようで、とても薄ら寒い思いをしています。

知事選でもいろんな人が「平和ぼけおばさん」を応援し（私もいれました）たけれどあの結果。東京都には石原氏を応援する人があれだけいるのか、という恐ろしさ。中央集権の現実化を感じます。

品川なんて、勧告うけるどころか、都の優等生にならんと、必死に尻尾を振ってる側で、確か先日も何らかの章を都から受けて、その授賞式にいそいそと区長だかなんだかが出かけたそうで「忙しいはずの自治体の幹部がお互い賞のもらいっこしてていいのかい」と新聞に載ってました。

ちなみにちょっと前区の出張所にいくと、職員のパソコンに紙で作ったひさしを貼っている。どうやら窓口から画面がみえないように（住基ネットが騒がれだした頃だったので）してるらしいんですが、こちらがちょっと体をずらすと画面丸見え。「目の悪い私でも画面内用全部読めますよ」というと「ああ、わかりましたぁ」とのことでしたが、果たしてどうなってることやら。

選挙に関わって

匿名希望

「あんふぁんて」四月号に紹介されていた『せめて行ってよ選挙には』グループの立ち上げには、びっくり半分、共感半分というのが正直なところです。

私自身、選挙や政治にはそれなりに関心や興味を持っています。他の皆さんだって無関心ってことはないはずだけれど、普段の友人たちとの会話の中ではまず出てこない話題ですよね。もし出したとしても、奇異の目で見られそう（何か暗黙の了解の中でタブーの話題っぽいというか…）で、こちらからもなかなか話せません。あんふぁんてのような不特定多数の人、様々な考えを持つ人たちの中でこの問題を取り上げたのは、すごいことだと思う。でも、だからこそ意見が考えが偏らずに、中立の立場で、どんな人にもわかり易い内容で、何かを発信していけたらすばらしいと思いました。

今回の地方選で、私は思いがけず選挙事務所でスタッフとして働くという体験をしました。以前動めていた職場の関係者が出馬するということで、社長とご本人がわざわざ我が家にまで来て下さったので、「できる範囲で」ということでお手伝いをすることになりました。告示前の三ケ月間は、後援会名簿のデータ整理の仕事が中心でした。パソコンなど、インターネットでお気に入りのホームページをチェックする位のレベルだった私が、この仕事のおかげでエクセルの初歩ぐらいの勉強をさせてもらえたことが、何よりの収穫だったかも（?!）

告示後の十日間は、嵐のようでした。出入りする人間もハンパじゃない。心から候補者を支援して来る人、私のような義理の人、地元で実際に歩いて支援をお願いしてくれる後援会の人たち、自分の利益を計算してくる人たち、あげくの果てには、ただ食事にくるだけの人や、他候補のスパイ（?!）まで。まがりなりにもボランティア的な気持ちがなければできない事なので、その人その人の人間性が出るし、普段からの人とのつながりの大切さを実感しました。そして、やっぱりお金がかかるものなのだということも、感じました。

お金をかけたくない！と思っても、かかってしまう…そんな感じ。選挙は、やっぱり一人ではできないです。人に動いてもらうということは、多かれ少なかれお金がかかってくるものだと思います。もちろん不正なお金ではなく、必要最低限の経費というレベルの話ですが…。

結果は、見事当選!!祝賀会では議員さん本人よりも、一緒に働いたスタッフと喜びを分かち合った…という感じでした。

政治って、とても遠くに感じてしまうけれど、誰のそばにも結構きっかけはあるものなのかもしれません。国会なんてレベルになるとお手上げの所もあるけれど、地域の議員さんと何かのきっかけで交流があったら、そこから始められるのかもしれません。

人の意見をうのみにするのでなく、真っ白な状態から、自分が関心をもてることから、少しでも興味を持ってみようとすることが、政治に参加していくスタートかな（?）と思います。

思わずグチが…

大阪府

今春、末娘がやっと入園し、待望の一人の時間を手に入れることができました。が、年少児なので行ったと思ったらすぐお迎えの時間になり、一学期の間は何だかんだと手がかかり、年長児の次男とペースが違うのでかえって疲れます。まあ、これは最初からわかっていたことなのですけど、やっぱりラクにはならないなあ…と、毎日ため息の日々です。

子どもたちは確かにかわいいし、愛しいし、大切なんだけど、私自身がこんなにも身を粉にして家事や育児をして働いて、体を休めることもできずにいるのに、アレもコレも片付かない。子どもたちは言うこと聞かないし、要求ばっかしてくる。おまけに子ども三人なので、お金はかかる…で、ふと、思うんです。こんな思いをしてまで子どもを産み育てる意味ってあるのかな？と。三人も子どものいる私がこんなこと思っちゃいけないのは十分承知しています。でも、全てのことに余裕のない毎日に追い回され、ついこんなことを考えてしまいます。

だからといって、子どもがいらないわけじゃ決してないんです。もし自分が生まれ変わってもやっぱりこの子たちのお母さんになりたいと思っているし…。じゃ、一体私は何を求めているんだろう？どうしてほしいんだろう？やっぱり母親としての自覚に欠けるのか、大人げないと言われても、母親失格と思われても、こんなことばかり考えてるこの頃です。

「少子化社会対策基本法案」って何？

（あんふぁんて・どんな保育がほしい会）

六月号にいきなり緊急の呼び掛けをしたので、驚いた方も多いと思いますが、この法案は私たちにとって大きな意味のあるものなので、紙面を借りて報告させていただきます。

実はここ数年、厚生労働省等を中心に様々な少子化対策が検討され、仕事と子育ての両立支援や地域における子育て支援、社会保障における次世代支援などが検討され、また実施されてきました。そしてそれらをより具体的に進めるため、自治体や企業がそれぞれの行動計画を作る上での指針となる「次世代育成支援対策推進法案」と、「児童福祉法」をすべての子育て家庭の支援を図る内容に改正する案が今国会に提出されました。「少子化社会対策基本法案」は、この動きに併せるように急浮上してきたのです。

もともとこの法案は一九九九年に超党派で衆議院に提出されたものの、国会解散に伴い廃案になり、二〇〇一年六月の通常国会終了間際、中山太郎ら九名の衆議院議員による議員立法として再び提出され、実際には審議されずに「継続審議」になっていたものです。

でもこの「基本法案」、一見子育てしやすい世の中のためのいい法律のようですが、よく読むと、子どもを産む・産まない、いつ・何人産むなどの選択を個人の人権として明記していません。しかも第十三条（母子保健医療体制の充実等）には、不妊治療に関してだけ特別に項目を設けて情報提供や助成などに言及しており、今後国を挙げて不妊治療促進の方向に動くのは必至。このままでは、産みたくても産めない人、産まない人生を選んだ人、子どもはいるけれどこれ以上産みたくない人などに、「技術も進み予算までついているのに、なぜ不妊治療しないの？なぜ子どもをもたないの？」とプレッシャーがかかってしまいます。

子どもが生まれない原因は環境の悪化その他いろいろあるのに、女性の身体にだけ負担を強いる方法で解決しようとするのはおかしいのでは？それに、さまざまな生き方を認めない雰囲気が作られてしまっては、「女は子どもを産んで一人前、産めない女は半人前」という偏見がはびこってしまうのでは？

「基本法案」の前文には、いきなり**「我らは、紛れもなく、有史以来の未曾有の事態に直面している」**と脅し文句が書かれ、**「国民は、家庭や子育てに夢を持ち、かつ、安心して子どもを生み育てることができる社会の実現に資するよう務めるものとする。」が【国民の責務】**だと書かれています。

これらにいくつかの修正が加えられ付帯決議が付いた上で、六月十二日に衆議院で採択され、現在参議院での審議待ち状態。イラク法案のおかげで四十日も国会会期延長になったため、審議未了で廃案になる見込みはごくわずか。しかし最近のヘンナ流れを考えると、少しでも抵抗を示しておかないと、子どもたちの未来がアブナイのです。

法律なんて私に関係ナイと思っている人、この法律によって差別されるかもしれない女性がいることを忘れないでね。この構図、他人事ではないのですヨ。（まとめ・川崎）

情報コーナー

★来期案決定会員交流会、日時決定！
今年の交流会は8月27日（水）池袋で
10時　～12時半　来期についての話し合い
1時半～3時半　交流会（昼食後）
場所・池袋隣接メトロポリタンプラザ10F
エポック10　会議室＆保育室にて
午前は保育付き。参加希望者は8月20日までにハガキ又はFAXで事務局まで申込。
（保育希望者は子どもの氏名・年齢・性別・おむつや食事の状況等を書き添えること）

★「あんふぁんて・学校を考える会」の代表交代、グループ・リスト変更を！
新代表・高橋

★平日あんふぁんてイン荒川自然公園
日時・7月23日（水）11時～3時半
場所・荒川自然公園（都電荒川二丁目下車）
集合場所・都電を降りてすぐのスロープを登ったところにある、公園入口。
小さい子向けの乗り物のある交通公園や、アスレチック、水遊び池などがあるので、梅雨明けの青空の下、遊びませんか？周囲にお店がないので、弁当・水筒・着替え持参。
申込みは7月21日（月）までに事務局へ。

事務局から

●6月号「北から南から」7頁に掲載の尾花沢市の「子育てランドあへべ」は、「あ～べ」（山形弁のレッツ・ゴー）の間違いでした。もとの原稿が横書きだったため、読み違えてしまいました。訂正してください。
●あんふぁんてのホームページに掲載している全国の女性関連施設リスト、内容が古くなったので更新したいのですが、人手が足りずに作業が進みません。誰か引き受けてくれる人、いませんか？
●6月末の会員数は275名です。

〈スケジュールメモ〉

7月14日（月）ミーティング（事務局）
7月28日（月）ミーティング（事務局）
8月4日（月）8、9月号発送（同）
★ミーティングや発送は10時半～3時。子連れ可・弁当持参。参加者は事前に事務局まで連絡を。

●あんふぁんては、会費のみで運営している会。会費の支払いがまだの人は、至急振り込みをお願いします。会費が切れても本人から連絡がないと、退会等の措置がとれません。休・退会や転居の時は、事務局まで連絡を。

あんふぁんてホームページアドレス　http://

事務局までの地図

☆当会について詳細を知りたい場合、封書に〒・住所・氏名・☎を明記し、切手四百円分（なるべく少額切手）を送って下さい。入会希望の場合はなるべく会費六ケ月分（三千円）以上まとめて、郵便局の振替口座に払い込んで下さい。

第290号　（毎月1回5日発行）
2003年7月5日発行
（1975年7月26日初刊発行）

あんふぁんて　7月号

発行人 /
発行所 / あんふぁんて出版部

電話
（☎平日12時～2時 それ以外FAX）
定価 / 500円
振替口座 /
加入者名 / あんふぁんての会

©本誌掲載記事の無断転載を禁じます。